

<研究の周辺Ⅱ>

院生の妊娠カレンダー

宇都宮千穂

社会での位置づけが変われば見えるものが違うと言うが、私の昨年は、それを実感することの多い一年だった。その理由は、妊娠したことにある。この妊娠は、OD1年目で初めての非常勤講師を経験し、夫とは仕事の都合で別々に生活をしている状況の中でのことだったため、試行錯誤の連続だった。以下では、妊娠・出産に関わる問題について考えてみたいと思う。

1. 妊娠前期 ～非常勤講師～

前期に生じた問題は、通勤だった。非常勤先までは、往復5時間、乗換えが3回あった。妊娠前期は、周囲に妊婦だということがわからないため、混雑の中でどんなにつらくても誰も助けてはくれない。また、階段や空気の悪い駅構内は、立ちくらみを起しやすい。こうした状況に私ができる対策としては、時間に余裕を持って動くことしかなかった。常に30分～1時間の余裕を持ち、いつでも休憩をとることができるようにした。また、不規則な生活では体調が途端に悪化してしまうので、毎日のタイムテーブルを決め、計画をたてながら生活していくようにした。ところで、妊娠中のエスカレーター利用には、本当に注意が必要である。通勤途中に何度か上から人が落ちてきたことがあり、非常に怖かった。

2. 妊娠中期 ～研究活動・大学院生活・産休～

中期に生じた問題は、産休の問題であった。産休には手続きが必要だが、職場によっては女性が少なかったり、結婚・出産で退職を選択するなどし、産休手続きに慣れていない場合がある。つまり、制度としては存在するが、運用できないということである。そういった場合、申請する側も受ける側も、不慣れな手続きを面倒に感じてしまい、退職を選択したり勤めたりしてしまう。こうなると、産休手続きをすることに罪悪感を持つようになり、子供が生まれることが皆の迷惑であると感じ、追いつめられたような気分になる。だが、このような状況に長くとどまるよりは、一刻も早く第三者に相談をし、現状をどう動かせば

よいのかを考えたほうがよいと思う。妊娠中の手続きや交渉は気力も体力も消耗し、「こんな小さな仕事、やめてしまってもいいのに」と何度も思った。しかし、家族や友人が、小さな仕事でも続けていく大切さを理解し助けてくれたことで、頑張ることができたし、仕事の大切さが理解できたような気がする。

3. 妊娠後期 ～論文・出産準備～

後期に入る頃、3万字強の論文を執筆した。執筆は年末から年明けにかけての3週間で、何日か徹夜をした。そのせいか、正月明けの定期健診では胎児の体重が増えておらず、ひどく後悔した。また、この時期の大きな仕事は、家事分担や徹夜のつきあいなど、夫にも負担が大きかった。

この仕事を終えてから、一応、産休期間となった。後期に入るまでは、研究や仕事をしながら生活を維持するだけで精一杯だったため、出産準備が全くできていなかった。結局、里帰りして出産することはできず、不十分な準備のまま京都で出産を迎えた。京都で出産した理由は、他にもある。一年近く定期健診を受けていた病院とは信頼関係があり、別の病院で出産だけをするに抵抗があったからである。私の場合、妊娠中は一人暮らしだったことから、そういった気持ちが特に強かったのかもしれない。また、知り合いの少ない京都で育児をすることを考えれば、京都の病院で出産し産後もつきあいをするほうが安心だと思ったことも理由の一つである。

出産までは、実家の母と夫が休暇を取って交代で京都に来てくれた。二人とも仕事や家事を抱えていたので、出産が大幅にずれると困るな、と思っていたら、予定日に生まれた。

4. 産後 ～研究再開の道のり～

子供が生まれれば、妊娠前の状況にすぐ戻れると思っていた。しかし、思ったよりも体力が戻らないうえに、気持ちも沈みがちで、昼夜無く泣くばかりの子供に翻弄された。

子育ては、子供の誕生から休むことなく半永久的に続く。驚くほどのスピードで日々成長していく子供を見るのは、本当に楽しい。だが、毎日の生活は自分のことなど忘れてしまう忙しさで、一体いつになれば一段落つくのだろうと気の遠くなるような気持ちにもなる。また、これまでの研究生活の生活を思え

ば、これからどのような暮らしが待っているのか頭の中が真っ白になることもある。

そんなとき、友人が「今はバトンを渡しているようなつもりで、研究を忘れない程度に続ければいいんだよ」と言ってくれた。子供の成長は早く、私の方が後追いでいるようなもので、なかなか生活のリズムは戻らない。けれど、自分のペースを見つける努力を続けていれば、少しずつでも研究を続けられそうだ。「低空飛行でいい、墜落しなければ」「昨日の自分と比較し、一歩でも半歩でも前進していれば良しとしましょう」とは島田淳子先生(昭和女子大学)の言葉だが、本当にそうだと思う。不思議な話だが、子育てが始まってから本来の研究ペースを取り戻したような気がしている。

5. 一年間の経験から ～現実と社会制度のはざままで～

この一年で学ぶことは多かったが、常に考えさせられたのは、社会制度についてである。

具体的な例を挙げると、保育所の入所制度である。周知のように保育所は、仕事をする親にとって不可欠な施設である。産後、仕事に復帰するならば、産前から保育所を探す必要がある。しかし、実は産前に保育所を探すのは難しい。保育所を必要とする親は、産休直前まで仕事をし、産休中は体調面でも精神面でも余裕が少なく、時間がとれないのである。そのうえ、保育所の入所は0歳児でも4月一斉入所のため、前年度の11月の入所申し込み間に間に合えば定員内で入所できるが、11月以降に生まれた子供は空き定員のある所にしか入所できず、場合によっては待機児童となる。子供は一年を通して仕事を持つ親から生まれる。こうした現実には、保育所は必ずしも合致しているとはいえないのである。

また、世帯に関する様々な手続きも悩みの一つであった。結婚生活をおくる二人がそれぞれ仕事を持つ場合、別々に生活せざるを得ないケースも出てくる。そんな家庭に子供が生まれる時、同居している場合に比べて、保険証、住民票などの手続きに一手間も二手間もかかる。窓口で自分の境遇を説明するのも一苦勞である。また、日常生活のなかで、「おかしい家族」「子供が可哀想」「家族は一緒に

いるのが自然だ」といった無遠慮な言葉を投げつけられることもある。私たちの家族の形は私たちが作っていくものなのだから、他人に理解してもらおう努力は必要だと考えている。しかし、こういった発言をする人に限って、理解しようとする姿勢はない。社会制度に合う「一般的な家庭」の形でないことは、様々な場面でストレスを生じさせるのである。

社会の制度は、ある一定の家族や社会人を想定して作られたものであって、その枠組みのなかで社会の構成員全員が生きていけるわけではない。つくられた枠組みが「正常」であり、そこからはずれたら「おかしい」な生き方をしているとするのは危険である。そもそも一人一人が自分の生活を振り返ったときに、果たして他人の生活を「おかしい」と言えるほど制度や枠組み通りに現実生活を送っているのだろうか。制度が自分の価値観を作り上げてはいないだろうか。

妊娠、出産そして子育ては、家族責任ではない。そして、後追いで作られていく社会制度の範囲内でしか許されないものではないはずだ。それは、子供を産み育てるという行為は、社会を再生産するために必要不可欠な営みだからである。これが性別の違いや立場の違いで理解できないというのなら、介護を思い起こしてみてはいかがだろうか。介護は、今や家族の枠組みの中では解決できない問題であり、親を持つ人間全てが顕在的にも潜在的にも抱える普遍的な問題でもある。また、年老いた親を抱えるのは働き盛りの労働者であるという点で、社会の再生産にかかわる問題でもある。こうした賃労働の陰で深まる問題は、行政、地域の人々、職場の仲間と理解し合いながら調整していくことなしには、問題はますます複雑化し解決の糸口すらつかめなくなりそうだ。

現代社会で暮らしていくためには、互いの立場を超えて理解することが大切と思う。「関係ない」という言葉を発する前に、まず、それぞれが置かれている立場からの情報を発信し、互いにその情報を聞く耳を持つことが必要だと強く感じた。

(京都大学大学院経済学研究科)